

## Interview①

広安小学校区  
自主防災クラブ 会長

はしもとじゅんぺい  
橋本純平さん  
(安永3町内)

【益城町を襲った熊本地震。自らボランティアとして立ち上がった、被災者たちの記憶】

# 話を聞いてくれる人がいる それが心の支えに



## 自ら被災するも 避難所運営に関わって

熊本地震の直後、広安小学校体育館は被災して使用できず、グラウンドと校舎の教室が避難所になっていたため、グラウンドで車中避難生活をしていました。

食糧配布の列に並んだときのことです。なかなか列が進まず様子をうかがうと、小学生が数人の大人と協力しながら一生懸命配布しようとしていました。人手が足りず配布が進まない状況でした。この時、手伝い始めたのがきっかけで、避難所の運営に携わることになりました。

発災から数日たつと、AMDAやピースボートがボランティアに駆け付けてくれました。毎朝、ボランティア、学校

の先生、役場の職員と私たちでミーティングをしていたのを覚えています。

医療・保健衛生分野を中心に活動するAMDAは、保健室を拠点としながら教室の見回りを行い、避難者の健康維持に関する活動をしてくれました。医療の知識がある専門の人がいてくれるのはとても心強かったです。

ピースボートは避難所運営を全面的に支援してくれました。食事を配るにも、当時、多いときは1回当たり約千食を配布していたため大混乱。教室から受け取りに来る人、グラウンドから受け取りに来る人、その動線を管理してスムーズに受け渡すにはどうしたらいいか。

こうしたときに災害支援の経験がある人からアドバイ

スをもらうことができるのはとてもありがたかったです。時には、避難者同士では言いにくいようなことも、ボランティアの人が間に入ってくれ

ることです。また、避難者でありながら運営にも携わる私たちにとつて、話を聞いてくれる人がいるということが心の支えにもなりました。

他にも、個人のボランティアの人が、多数の物資で雑然としていた物資置き場を品目ごとに整理し管理してくれたり、本当に多くの人に助けられました。

## 昨年の豪雨災害 人吉で共助活動を

こうした経験もあって、昨年は会社の有志十数人で、豪雨により被災した人吉市に

ボランティアに行きました。

コロナ禍ではありましたが、熊本地震のときボランティアの人がいて助かったという記憶があったので、迷いはありませんでした。実際、現地に入ると、ひつくり返った車、無邪気に走り回る子供たちと疲れきった顔をしている大人たち。熊本地震のことを思い出しました。

## 人ごとと捉えず 災害に備えて

ボランティアセンターでの受付後、人吉市内の80代のご夫婦の自宅に向かいました。床下の泥をかき出し、土のう袋に入れて庭に積み上げる作業。真夏のエアコンがない家の中、マスクをしたままでの作業は決して楽ではありませんでしたが、30分に1回休憩

を取りながら活動しました。飲み物や塩分補給ができるあめなどを持参していたので、初めてのボランティア活動を無事に終えることができました。体力的にはきつい部分もありましたが、同じ会社の仲間もみな、「行ってよかったです」と話していました。

もちろん、災害は起こらないのが一番ですが、近年は毎年のように全国のどこかで大きな災害が発生しています。決して人ごとと捉えず災害に備えながら、災害が発生した場合には、自分にできる範囲でボランティア活動も行いたいです。



2018年10月に行われた訓練。ブロック塀の下敷きになった人を救出